

げまつさ。定吉、其蜜柑を其處へプチ明け……………よしや退け〜。……………いよう有た〜。お客さん良えのが出て来たで。』

『ギエツ。有たかツ。』

『これ丈けの中から只つた一つ、これ見なはれ、色と云ひ光澤と云ひ、取り立てとチツとも違わん。』

『やれ助かつた。あゝ大きに有難ふ、早ふ賣とくなはれ。』

『いや買ふてお貰ひ申しませふ。がチツと高ふおまつせ。』

『承知してます季節外れの果物、高いのは當り前ですがナ。何ぼで賣て貰えます。』

『左様、負からん處で千兩や。』

『エツ。千ツ。千ツ。ふわアー。』

『あ平太張りなはつたナ。』

『腰が抜けましたんや。……………もし、何ぼ何でもそら餘まりや。蜜柑一つが千兩やなんて、そんな足許を見る様な……………。』

『もし、人聴きの悪い事云わんと置いとくなはれ。私の家も長年此土地で商賣してまんね、お客さんの足許見て懸値云ふ様な商ひはしまへんで。廣い天満に唯一軒の蜜柑問屋と云ふ看板を揚げてるとナ。いつ何時買ひに來られても無いと斷る事は出來ん腐るのは承知で藏ひますのや。一粒選りの上

物ばつかり、何千箱の中から一箱残る、其一箱の中から、たつた一つ残た其蜜柑や。みんな腐つて仕舞ふたら又今年も暖簾の資本入れしたと思ふて、笑ふて諦めますワ。たとえ一つでも残つたら、それに腐た分を皆かける。商人冥利、鏝一文損はよふ仕まへん。千兩でお氣に要らにや、どふぞ止めとくなはれ。』

『ま、ま、待つとくなはれ。兎に角主人と相談して來まつさかい、どふぞ暫くの間待つとくなはれや……………あゝア、何やら今日は全で夢見てる様な。こないして走つてゝも、何やら足が宙に浮いてる様な氣持がするがナ。……………あゝア唯今戻りました。』

『オ、番頭どん、甚ふ顔の色が悪いが、蜜柑は無かつたのぢやナ。』

『いえ、一つ丈け御座いましたので……………。』

『何ぢや有たか。やれ有難い〜。婆さん蜜柑が有たといの。番頭どん勘忍しとくなされや。我子可愛さに無茶な事云ふてナ。お蔭で倅が助かります。』

『あ鳥渡待とくれやす。處で其蜜柑が無茶に高ふおますので……………。』

『高いと云ふて、一體何ぼ位ぢや。』

『一つ千兩で。』

『安いッ』